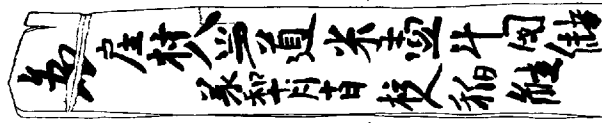


撰津国風土記散歩 17



住吉宮町古墳群(続)

馬・牛に関連する遺跡

「勘 戸主椋人安道米壹斗国儲

承和十月十日椋人稻継 合・」

深江北町遺跡出土の木簡、墨書土器「驛」

寺 岡 洋



はじめに

前号の続きです。今号は、まず、神戸市域での馬に関連する遺跡を見ます。馬ではないが牛を殺し(殺牛)、水辺で祭祀を行っている郡家遺跡の例も併せて紹介します。郡家遺跡は住吉宮町遺跡と接しており、住吉川右岸(西岸)において同一文化圏を形成していたと考えてよく、殺馬・殺牛という独自の習俗をもつ渡来系集団の集住地といえる遺跡である。ついで、殺馬の例が多く見られる生駒山西麓の遺跡群、長原遺跡(大阪市)、さらに韓国での事例(遺跡)を紹介したい。

住吉宮町古墳群の32次調査1号墳では、5世紀中葉から後半にかけて築造された古墳の周濠から馬歯・下顎骨(馬首)が1個体出土したが、阪神間で古墳時代の他遺跡からの馬の殉葬例は見当たらないようである。馬形埴輪は生きた馬の代わりだとの考えもあるが、馬形埴輪については取り上げない。

高塚山古墳群、宅原遺跡、深江北町遺跡

殉葬ではないが、高塚山古墳群(神戸市垂水区多聞町)の2号墳では、横穴式石室の石に馬の線刻画が描かれ、馬具が出土している(『高塚山古墳群 発掘調査概報』神戸市教委1994)。高塚山古墳群は特異な古墳群で、1号墳はT字形石室(石室が横長)に前室が造られる複式系の石室。8号墳も複室構造(石室が前室・後室と複数造られる)の横穴式石室(全長13.3m)で、石室内で3棺、羨道で1棺が火葬されていた。9号墳には魚の線刻画が描かれている。壁画、T字形石室、複室系石室、石室内の火葬など、いずれも渡来系集団との関連がうかがえる事象である。

高塚山古墳群は明石海峡を見下ろす高塚山

(海拔192m)の山頂周辺に位置しており、明石海峡をおさえるために配置された渡来系集団の墳墓と考えられる(寺岡「高塚山古墳群—明石海峡を扼した渡来系集団—」『むくげ通信』147 1994)。

高塚山古墳群は現在一部残るのみ。神戸地下鉄・学園都市駅、神戸外大の裏山。

宅原(えいばら)遺跡(神戸市北区長尾町)の宮ノ元地区では、7世紀前葉から中頃、堅穴住居を壊して掘立柱建物群がつくられ、かたわらに掘られた大溝から馬の下顎骨とともに、伎楽面(ぎがくめん)と思われる木彫面、人形(ひとがた)、松明、梅・桃等の種子など、祭祀と関連する遺物が多く出土した。律令祭祀に動物供犠がみられる珍しい例といえる。祭祀を執行した集団の出自が想像される。

宮ノ元地区は律令制下の地方官衙である評衙(郡衙の前身組織)あるいは郷衙に関連する遺跡とされる。宅原遺跡の所在地はかつての有馬郡幡多(はた)郷であり、秦氏との関連が強い地域である(『宅原遺跡・宮ノ元地区の調査』妙見山麓遺跡調査会1986)。

宅原遺跡は神戸電鉄道場駅から西へ約1km、長尾川流域。圃場整備のため道路・法面などが調査され、「評(こおり)」「五十戸」「郷長」など書かれた墨書土器が出土している。

深江北町遺跡(神戸市東灘区深江北町)では、約30点の動物遺存体が出土し、すべて馬の骨と確認されている。年代は8~9世紀に属すると推定され、川や溝に廃棄されたものではないかとされる。深江北町遺跡では、「驛」と書かれた墨書土器が多数出土しており、葦屋駅家(あしやのうまや)に関連する遺跡とみられ、駅家で使役された馬であろう。

ここでは、「椋人(くらひと)安道」と書かれ

た木簡が出土し、渡来系氏族の「葦屋倉人(くらひと)」、「蔵人(くらひと)」と一致するのが注目される(『深江北町遺跡 第9次 一葦屋驛家関連遺跡の調査』神戸市教委 2002)。

報告書には、神戸市内の馬歯出土遺跡が集成されており圧倒的に中世の例が多いが、今後、古代の出土例も増加すると思われる。

深江北町遺跡(第9次)は、阪神芦屋駅の西、マンション(ライオンズガーデン芦屋西)。北側は芦屋市域になり、津知(つじ)遺跡。名称は異なるが共に葦屋驛家、及び郡・郷の施設(官衙)も存在したようである。

牛の下顎骨を祀った郡家遺跡

今年の夏、郡家遺跡の城ノ前地区で牛の下顎骨を使った祭祀跡が発掘された。場所は香雪美術館・弓弦羽神社のすぐ西のマンション建築予定地(東灘区御影町御影字城ノ前)。

牛の下顎骨は、川底(自然流路)に掘り込まれた2ヶ所の土壌(穴)のうち、SK05と名づけられた土壌内で見つかった。下顎骨は、砕いた須恵器の甕の上に置かれ、さらにその上に丸い石(直径約25cm)が載せられていた。須恵器の年代は、古墳時代の中・後期(5世紀末～6世紀初頭)。もう一つの土壌からは牛骨は見られなかったが、同じように甕の破片の上に円礫が置かれていた。

川岸にも3ヶ所の土壌があり、SK06では完型の須恵器の杯と高杯、円礫、土製品(人形か?)などが埋納されており、SK03では土壌内で焼成した跡が残っていた。高杯に牛肉を載せ、土壌内で牛肉を焼いて神に捧げたと想像できなくはない。

川底の遺構は、いずれも渇水時に掘られたもので、雨乞いのため牛馬を捧げた動物祭祀跡とされる(「現地説明会資料」郡家遺跡調査団 2003. 8. 9)。

このような牛馬を犠牲にする祭祀は古墳時代中期まで日本列島に存在せず、渡来系集団の移住に伴い持ち込まれた習俗になる。

この習俗は後代に残り、祈雨に際し牛馬を生贄にする例は、皇極紀元年(642)の記事に、「……或いは牛馬を殺して、諸の社の神を祭る。……」などにみられる。祭祀の対象にな

ったのは異国の神であろう。桓武天皇の長岡京時代である延暦十年(791)には、「牛を殺して用て漢神(からかみ)を祭ることを断ず」と禁令が出されている。井上光貞氏は、「殺牛馬儀礼がわが国固有の思想とは異質であり、……公的祭式には、犠牲的性質がほとんどみられない」と指摘されている(『日本古代の王権と祭祀』東京大学出版会 1984)。

郡家遺跡では、「畑の耕起跡に混じり、獣足跡や足跡もみられることから牛馬による耕作の可能性」が指摘されており、牛の存在が裏付けられた(『郡家遺跡 御影中町地区第4次調査』大手前女子大学 1992)。

東大阪市の馬歯・馬骨出土古墳

東大阪市の生駒山西麓に位置し、律令制下の河内・若江郡になる。植附(うえつけ)古墳群は一辺10m前後の方墳が7基調査され、1号墳の周溝から馬の上顎骨、韓式系土器、鉄滓(てっさい)などが出土した。古墳群の年代は、5世紀後半～6世紀後半。段上(だんのうえ)古墳群では、5世紀後半の2基の小型低方墳が調査され、1号墳の周溝から馬歯、韓式系土器などが出土している(『東大阪市の古墳』東大阪市教委 2001 『うまかいのさと』東大阪市立郷土博物館 2002)。

東大阪市区で調査された古墳群は、低墳丘の方墳、周溝からの馬首の出土など、住吉宮町の例と極めて類似する。出土遺物は典型的な渡来系集団の特徴を示している。

ところで馬から外れるが、生駒山西麓でつくられる曲げ庇(焚き口上部を曲げて庇とする)系の韓式系カマド(移動式カマド、韓竈ともいう)が、住吉宮町古墳群の東隣、芦屋の城山古墳群から出土している。

「……六甲山南麓から出土している曲げ庇系カマドを副葬する古墳の被葬者は、生駒山西麓から石川流域に拠点を置く渡来系氏族の同族、または同地域からの渡来系氏族の移住を示すものと推定」されている(中西克弘「曲げ庇系カマドを副葬する古墳」『荻田昭次先生古稀記念論集』1999 『渡来人とのあい』東大阪市立郷土博物館 1999)。

細切れになりますが、以下、次号。